

---

# アマガミ ~ 恋を知らない少女と愛を知りたくない少年 ~

ムタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アマガミ〽恋を知らない少女と愛を知りたくない少年〽

### 【Nコード】

N0539U

### 【作者名】

ムタ

### 【あらすじ】

今まで「恋」という物を知らなかった少女と「あるもの」を避けてきた少年が出会う時、何が起こるのか？これはその結末を語るお話である

## その名はナポリタン（前書き）

初投稿の小説に行き詰まったので、こんなん書いてみました。  
携帯で書くので、残念男（初投稿小説）よりかは早く投稿できる、  
かも？

あと全話短いです。

6 / 1 4 「自分は」の所を編集。 1 9 9 9 年に禁書ネタは使え  
ませんよね。

## その名はナポリタン

S a i d 主人公

寒い。寒すぎる。

天気予報では「今日は春のような暖かい日になるでしょう」なんて言っていたが、真逆だ。

流石当たらない事で有名な予報士である。見事な予報だ。

なんて皮肉も言いたくなるような気温にウンザリしていると、更にウンザリする場面に出会ってしまった。

「君、今暇だよな？遊ばない？」「大丈夫大丈夫。別に変な事はしないからさ（笑）」「ほら、行こうぜ」

「えっと……」

これなんてマンガ？

いや、今のはマンガに失礼だったな。

一言物申すなら・・・古っ！

今時そんなナンパのやり方しないだろ。今時がどんなかは知らないが。

だが困った事になった。普通なら迂回して行けばいいのだが、ここは一本道。いちいち後ろに戻ってから回りこまなくてはいけない。

それは非常にダルいし、何よりこの茶番劇を目撃してしまっている自分は特にお人好しという訳ではない（と思う）が、この状況は「どうにかしてやりたい」と思った。

今所持している、

・財布

・携帯

・使い捨てカイロ

・スーパーのビニール（中には、スパゲッティ、ケチャップ、トマトホール、合挽き肉。夕飯の食材である）  
・コンビニのビニール（肉まん、シャー芯）  
で、どうにかするしかないとは。  
全くもって不幸だ・・・

（　　）ハア

S a i d    チンピラに絡まれた美女

「ほら、行こうぜ」

「えつと・・・」

私は今、ちょっと（？）ヤンチャしてそうな男の子達に絡まれている。

（うーん、弱ったなあ・・・）

今ここに高校一年生からの親友がいてくれたら、まだマシな状況になっていただろうと思うが、彼女とは数分前に別れたばかりだ。  
よって今、ピンチである。

「暇なんだろう？なあ」

「きゃっ！」

いきなり腕を捕まれた。

結構力が強い。もちろん私の腕力じゃ振りほどけない。どうしよう。

「だ、誰か助「すみません、そこをどいてもらえますか？」け、て・・・？」

そんな時、片手にビニール袋を持った女の子が不意に現れた。  
あ、凄くキレイな子・・・じゃなくて！

「ああ、何だデメエ」

「いや、ここ通らなきゃ帰れないんで、退いてください」

「はあ？」

「・・・だから、邪魔だつて言つてんだ、よっ！！」

そう言うと、女の子はビニールからケチャップを取り出した・・・  
つてケチャップ！？

そしてチンピラAの眼に向かって発射。クリーンヒットした。

「ぐおっ！ま、前が見えねえ！」

「まずは1人目」

チンピラAが眼を擦ってる間に、後ろに回って首筋に手刀1発。A  
を退場させてしまった。

「調子こいてんじゃねえぞ！」

チンピラBが女の子の強さに焦ったのか、勢いよく突撃していった。

「それ、フラグだから」

女の子はそれに動じず、スルリと突撃を避け、Bが振り向いた瞬間  
にケチャップビーム。そして手刀。

あつ、と言つ間に2人も伸してしまった。

「く、くそっ！」

女の子が只者でないことに気付いたのか、Cは私の手を離して走り去っていった。

（それにしても素早かったなあ。まるで軍人さんみたい）

「大丈夫ですか？」

「え？あ、うん。大丈夫」

「そうですか」

女の子はそう言つとお辞儀をして歩き始めてしまった。

「ちょ、ちょっと待って！」

「はい？」

「名前、教えてくれないかな？」

「・・・波山<sup>はやまゆう</sup>邑<sup>むら</sup>です。では」

波山さんが遠ざかっていくのを見て、私はなんとなく思った。

（彼女とは、また会える気がするなあ・・・）

この時思つた事が驚愕と共に実現するなんて、今の私には分かりもしなかった。

その名はナポリタン（後書き）

皆さんヒロインの名前はもうお分かりでしょう（笑）

まあ元より隠している訳ではないですが。

書き方は大体こんな感じです。

もしよければ、続きも読んで頂けると幸いです。



## 知らぬが仏（前書き）

すいません！若干説明が足りなかったようで、リア友から指摘されてしまいましたorz

前は邑が1年生の春休みで3月下旬。

で、今回は邑が2年生、つまり原作の年の4月下旬です。

## 知らぬが仏

S a i d 邑

「フラれた？」

「そうなんだとよ。1年の大山ってヤツが登校してきたもりしま森島先輩に告ったらしい」

「いくら何でも早くないか？まだ4月なのに。で、結果は？」

「言わずもがな。当たって砕け散ったらしい」

「まあ森島先輩だからね。そう簡単にはいかないでしょ」

「ところでさ、森島先輩って誰？」

「「ゑ？」」

朝、教室に来て早々、中学からの友達である梅原正吉とうめはらまさよし橘純一が詰め寄ってきた。

何事かと聞くと、1年坊が先輩に告白して玉砕したらしい。4月から御愁傷様である。

で、そのもりしま森島某先輩とは誰かと聞いたら、『コイツ大丈夫か？』みたいな顔をされた。

「おい、それ本気で言ってる……まあお前なら有り得るか」

「梅原お前放課後体育館裏な？」

「冗談だよ大将。森島はるか先輩は、2年連続でミスサンタを授与した校内1の美人との噂もある有名人だぞ？」

「2年連続……ああ、去年何か騒いでたな。ミスサンタがどうのここのって」

俺達が在籍する輝日東高校は、12月24日に毎年クリスマスパーティーをやる。理由は、この高校の創設者の誕生日だかららしい。

そんな訳で、別名『創設祭』と呼ばれている。で、ミスサンタというのは創設祭の中で行われるミスコンの1位に輝いた人に送られる称号である。

「そんなに綺麗なのか？」

「波山も見れば納得するって！」

橘、そんなにサムズしなくても大丈夫だから。

お前の先輩愛は充分すぎてボツシュートしたいくらい伝わったから。

「綺麗、ねえ……」

そういえば、1ヶ月前くらいに襲われてた人も顔立ちが整っていたな。名前すら知らんがきつと逆ハーレムでも形成できるくらいウハウハだろう。

（ま、かんけー無いがな）

（へ）

「お、運がいいな大将。森島先輩だ」  
「ん？」

男3人で下校しようと廊下を歩いていると、梅原が廊下と階段が混じりあう所を指差した。

そこには、仲良く談笑している切れ目の先輩と毛先が特徴的な先輩が、って。

「片方の先輩に見覚えがあるんだが・・・」

「どっちなの？ちなみにクールな方が塚原先輩、カチューシャの方が森島先輩だよ」

「・・・・・・・・・・」

「お、おい、先輩がこっち見てるぞ」

確かに。

さっきまで談笑していた筈なのに、こっちを見た瞬間いきなり話が止まった。

しかもガン見である。森島先輩が。

「あ、先輩がこっち来る」

「波山、お前が見たことある先輩って・・・」

「多分梅原の予想通りだ」

成る程。あれほどの美貌なら今朝の話も頷ける。

まあ逆ハーレムどころか粉碎（男子の恋心的な意味で）しまくってるがな。

「あ、やっぱり波山さんだ！」

「お、お久しぶりですね森島先輩」

「あれ？私自己紹介したっけ？」

「いえ、先輩は有名人ですから」

知ったのは今朝だが。

「・・・・・・・・やっぱ本人かあ。ハア。」

実は別人でした、とか期待してたんだけどな。  
5%

「ねえ、それよりもさ」

「はい」

「なんで男子の制服なんか着てるの？」

「……は？」

「いや、似合ってるんだけどさ、何でかなうって」

「森島先輩……」

「無知って、残酷だよな」

おい、まさかとは思うが……

「先輩」

「ん？」

「俺、男ですけど」

案の定、先輩はフリーズしてしまった。てか制服の時点で気付けよ。

「ええええええ「はるか、失礼よ」むぐっ」

「ごめんね。はるかの躰がなくなって」

「い、いえ」

躰！？

「自己紹介がまだだったわね。私は塚原<sup>つかはら</sup>ひびき。はるかの飼い主よ」

「（か、飼い主……）あ、どうもです。俺は……」

「知ってる。波山<sup>なみやま</sup>君よね？」

何故知ってる？俺なんかしたか？

橘と梅原の方を見ると、眼を逸らされた。

おい、こっち向けやコラ。

「ふふっ、本当に有名な人ほど自分では気がつかないものよ。はる

「かがいい例」

「ん、なに？」

「納得です」

「でしょ？」

「もう、なによー！」

その後、先輩方を交えて帰った。

親友達から何も聞かれなかったのはいいが、後が怖い。

てか俺の噂って何さ？まあ予想は出来るが。

ハア、自分の女顔が恨めしい・・・

## 知らぬが仏（後書き）

さて、これからどうしようか（切実に）  
あの人にフラグ立てるの難しいからなあ・・・  
また次回も会えたら嬉しいです。では

好奇心は猫をも殺す（前書き）

今回は前回の次の日の話です。



## 好奇心は猫をも殺す

S a i d 邑

「波山ー。お客さんよー」

「・・・んー？」

昼時に呼び出しとはついてないな。誰だ？

今俺に声をかけた奴はたなまがある棚町薫。俺や梅原達と同じ中学校出身の、俺の数少ない女子の知り合いである。

「アンタ、いつの間に“あの人”と知り合いになったのよ」

“あの人”？」

「ミスサントラ2冠の人」

「ああ・・・まあ成り行き？だな」

あながち間違っていないはず。自信はないが。

「成り行きで全校男子の憧れの的と知り合える訳ないでしょ。ほら、お姉さんに言ってみなさいな」

「だから本当に成り行きなんだよ」

「アンタが成り行きなんかで・・・まあいいわ。ほら、待たせてるんでしょ」

「誰が話しかけたんだ、誰が」

全く、これだからもじゃ子（棚町の髪のこと）は。

とか思っていたら、後ろからメンチビームが飛んできた。読心術を使うなよ。

俺はビームで収まっている内に廊下に出た。棚町の十八番であるエ

ルボ―は受けたくないからな。

三（・・）

俺が廊下に出ると、既に人だかりが出来ていた。  
・・・こうなるから待たせなくなかったんだよ。

「すみません先輩。遅れました」

「あ、やつと来た」

森島先輩が人だかりから出てくると同時に、視線があちらこちらから飛んできた。

う、胃に穴が空くようだ。

「それで先輩、何かご用ですか？」

「あ、うん。えっとね、もうお昼は食べた？」

「いえ、まだですが」

「ならさ、一緒に食べない？話したい事もあるし」

まあこの振りからはそうなるだろうな。

しかし、これまた厄介な方に誘われたぞ。

どうするか・・・

（少年黙考中）

まあ塚原先輩もいるだろうし、大丈夫だろ。

「わかりました。弁当取ってきます」

「本当？じゃあ屋上に来てね」

そう言う先輩は屋上に向かって行つた。

ハア、屋上に行くが億劫だ……

(――)

呼ばれた通りに来てみたが、森島先輩以外は誰も来ていない。屋上に人が居ないとは珍しいが、何故塚原先輩の姿も無いんでしょうか？

「先輩、塚原先輩は？」

「え、ひびきちゃん？ひびきちゃんは水泳部の集まりで来ないけど、どうして？」

「いえ、別に」

まさか2人きりだとは……

これまたついてない。

仕方なく先輩と2人で食べる事にした。

「このお弁当、波山君が作ったの？」

「ええ、親の都合で殆ど一人暮らし状態なんで」

「へえ、いいなあ。私料理はあんまり上手くないから」  
「意外ですね」

「それ、1年生の頃にひびきちゃんにも言われた……」

「だと思いました」

「むう」

等と話をすること約15分。

「……流石に我慢の限界だ。もう質問してもいいだろう。」

「そういえば、話って何ですか」

「……あ、そうだ。波山君に言わなきゃいけない事があったんだ！」

「先輩……」

頼みますよ。これじゃあ昼食食べに来ただけじゃないですか。

「あのね、この前助けてくれた時に、きちんとお礼言っていなかったから」

「この前……」

「うん。……あの時、助けてくれてありがとう。凄く嬉しかったよ」

「いや、本当に邪魔なだけでしたし。しかも1本道だから余計に」

それも理由の1つだが、やっぱり「助けてい」と思ったのが1番の理由。

何故そう思ったのかは不明だが。

「君は、優しいんだね」

「……そんな事ないですよ」

慣れない事を言われたからなのか、先輩の顔をハッキリと見てしまった。

整った顔立ち。

形の良い眉。

そして目。

優しく、暖かい眼差し。  
まるで母親のような……………

『ゆづの髪は、凄くキレイだね』

「っ！す、すいません先輩。次の授業の準備があるので、先に失礼します」

「え、あ、ちよつと！」

俺は先輩に一礼して足早に屋上を後にした。  
次の時間はLHR  
用意する物なんて、もちろん無い。

S a i d はるか

「行っちゃった……………」

波山君は、そそくさと教室に行ってしまった。  
何かから逃げたすように。

「何か、かあ」

多分それは「人」や「物」じゃなくて、もっと曖昧な何かだと思う。  
最も、山勘もいいところだけど。  
……もっと彼の事を知りたい。  
これは恋や愛とかではなく、好奇心。  
自分が初めて感じた物を、もっと知りたいと思うのと同じ。

「うん、まずはひびきちゃんに相談だ！」

この時の私には、波山邑という人間を構成する上で、かなり重要な部分を掠めていた事に、これっぽっちも気が付いて無かった。

## 好奇心は猫をも殺す（後書き）

森島先輩の口調が難しい・・・

とか言い出したら他のキャラ全員難しいんですけどねwww

二人を絡ませるのが、こんなにも大変だとは思わなかったんです。  
感想や指摘などお待ちしています。

ではまた次回に。

## 先輩方のターン（前書き）

今回は題名通り邑と先輩方しか出てきません



## 先輩方のターン

S a i d とある女子高生達

「もう5月も下旬。それなのに……1年の部員が掛け持ちだ  
けってどうよ？」

「……別に構わない」

「何日<sup>ひよ</sup>和ってんだ愛歌<sup>まなか</sup>！このままじゃ野点<sup>のだて</sup>以外りほつちと3人で部  
活だぞ！？なんとか2人、いや1人だけでも茶道部に！」

「……具体案は？」

「そんなもんあるか！なんか茶道似合いそうな奴見つけたら勧誘！  
以上！！」

「……面白い。乗った」

「待つてろよ、まだ見ぬ大和撫子」！

「……おー」

S a i d 邑

先輩と気まづくなつてからもう1ヶ月近くが経った。

それまでに先輩と何度かすれ違つたが、先輩が何か話しかけようと  
する度に会釈して逃げた。

臆病者。

そう言つてくれても構わない。だが、こちらにも事情があるので譲  
れない。

先輩、牽いては『』とは極力関わりたくないのだ。

第一、あそこでフラッシュバックするなんて思わなかった。

そんな5月の終わり頃に事件が起きた。

（ ）

昼休み。

名も知らぬ先輩に拉致られた。

「……いや、マジで。」

久しぶりに1人で食堂に行って昼食を食べた後、教室に帰ろうとしたら、

「……大和撫子発見」

「でかしたぞ愛歌！」

「は？」

「さあで、ちょっと一緒に来てもらおうか」

「……むしろ連行」

「いや、ちょ!？」

と、そのままどこかの教室に宣言通り連行された。  
で、今。

「さて。君、茶道っていいと思わないかい？」

「茶道？」

「……和の心」

「はあ」

椅子に無理矢理座らせられ、何故か茶道について尋問(?)されている。

いや、和の心とか言われましても……

「あ、ゴメンゴメン。自己紹介がまだだったね。私は3 - Aの夕月ゆづき琉璃子るりこ。茶道部部长をしているんだ。で、こっちが」

「・・・・・・3 - A飛羽愛歌。I am 副部長」  
「どうも」丁寧。俺は2 - Aの波山邑です。で、何故茶道部の先輩方が俺を？」

何となく、というかほぼ100%理由は分かるが念のため。

「まあ敢えてこちらから言わせてもらうが・・・・波山さん。茶道部に来ないか？」

「・・・・・・Welcome」  
「・・・・・・」

やはり勧誘だったか・・・・って、波山『さん』？  
・・・・・・またか。orz

「ハア・・・・あのですね、俺h「茶道部はいいぞ」。部はかなりユルいし、何より部費で菓子が食べ放題！おまけに人数が少ないからゆつくりできる」あの、ですかr「・・・・・・住めば都。今ならお試しでも可」・・・・人の話を聞いて下さい」

第一に夕月先輩、それを売りにしちゃダメだろ。  
お菓子食べ放題とか食いしん坊しか食いつかないし。  
人数が少ないのはもはや問題だし。

( - - - )

「くしゅん！」

「あれ？桜井、風邪でも引いた？」

「うつん。大丈夫だよ香苗ちゃん」

「そっか」

「でもどうしてくしゃみなんかしたんだろ？」

( ー ー ? )

閑話休題。

こちらに戻るうか。

「で、茶道部。どうだ？」

「……おいでませ」

「あのですね、まず最初に言いますが、俺はおとk「あや？波山君、  
どうしてここに？」まぢか……」

若干強引にだが、茶道部先輩方の誤解を解こうとしたら、思わぬ人  
が教室に入ってきた。

いや、相手からしたら“帰ってきた”が正しいか。

「ど、どうもです。森島先輩」

「うん、久しぶり……でもないかな？あ、でもお話したのは久  
しぶりだね！」

「ええ、まあ……」

全力で避けてましたし。

「てか先輩、3-Aだったんですか」

「言ってなかったっけ？」

「初耳以外の何物でもないですよ……」

ハア、こうなるなら事前に調べておけばよかった。

てか3年生の教室に連行されるなんて予想外すぎるわ!!

3学年教室も避ける対象の1つだったのに・・・

「ハア・・・」

「もう、会った時から溜め息ばかり。そんなんじゃダメだぞ?」

誰のせいだと小1時間問い詰めたいが、したところで暖簾に腕押しだろう。

「お、お前は・・・!」

「・・・・・・（無言で構える飛羽先輩）」

な、何だ?

何で茶道部の先輩方はそんなに森島先輩を警戒してるんだ?

いや、気持ちは分かるんだけどさ・・・

まあいいや。この隙に教室から逃げるか。

「ちよつと待つて」

逃げられなかった。

俺は森島先輩と一緒に帰ってきていた塚原先輩に呼び止められてしまった。

「な、何でしょう?」

「今日の放課後、キミ空いてる?」

「特にありませんが・・・」

「そう。ちよつと手伝ってほしい事があるのだけど」

「構わないですけど」

「良かった。ならSHRが終わった後に、ここの階にある空き教室

に来てくれる？」

「了解しました」

と、ちょうど話し合いが終わった時にチャイムが鳴った。

「波山君。宜しくね」

「分かりました。また後で」

「ええ」

しかし一体、何を手伝えればいいのだろうか？

(――?)

S a i d 三人称

邑が3 - Aの教室から出た後、塚原ひびきはため息をついた。

「まったく、世話の焼ける2人だわ」

「どうしたのひびきちゃん？何だか呆れた顔してるけど」

「・・・・・・ハア」

「？」

塚原ひびき、苦勞人である。

「まあいいわ。・・・それよりはるか、今日の放課後って空いてる？」

## 先輩方のターン（後書き）

塚原先輩マジ苦勞人（笑）

そして茶道部トップ2 参上。

夕月先輩の口調には若干の自信アリ。

次回は塚原先輩の逆襲（？）

ではまた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0539u/>

---

アマガミ～恋を知らない少女と愛を知りたくない少年～

2011年9月13日23時13分発行